

エ ラ ム 語

—— 研究途上にある古代言語 ——*

The Elamite, an Untamed Language

F. マルブラン=ラバット (松島英子訳)

F. MALBRAN-LABAT (tr. Eiko MATSUSHIMA)

Abstract This conference aims to be both an overview of the structures of the Elamite language relying on its belonging to the agglutinative languages, and to define what we know and what remains debatable; this means I will not exactly describe the state-of-art but only the main characteristics and the points which should be discussed and what is my opinion on those points. As this communication should not exceed the time assigned to me, I shall evoke only those language structures and those questions, without describing and analyzing them in detail.

Keywords Ancient Iran (古代イラン), Elamite (エラム語), agglutinative languages (膠着語)

は じ め に

この発表は、エラム語を膠着言語の一つと位置づけつつ、現時点でわれわれが得ている知識と、議論の余地が残されている陰の領域の双方に目をやりながら、この言葉の構造について概要紹介を目指すものである。ただし本稿においては、事項を喚起するにとどめたい。エラム語についての詳細な既述や分析は、それ自体で一冊の著作を必要としよう。

* 本稿はフランス国立科学研究所で長らく古代メソポタミア・古代エラムの文献・歴史研究に従事してきたフローランス・マルブラン=ラバットが、2014年12月6-7日に京都大学ユーラシア文化研究所において催された国際シンポジウム *Ancient Iran: New Perspectives from Archaeology and Cuneiform Studies* (Iran-Japan Project of Ancient Texts 主催) において、招待研究者として行った発表(当初は英文)の内容である。発表原稿はその後加筆修正の上、K. Maekawa (ed.), *Ancient Iran: New Perspectives from Archaeology and Cuneiform Studies, Proceedings of the International Colloquium held at the Center for Eurasian Cultural Studies, Kyoto University, December 6-7, 2014*, Kyoto, March 20, 2016 (Nakanishi Printing Company), (文部省科学研究費報告書を兼ねる) において pp. 37-51 にフランス語で出版された。松島は F. マルブラン=ラバット本人の了解を得て、フランス語版の論文を翻訳し『西南アジア研究』に寄稿した。テヘランの博物館において2011~2015年に文献資料調査を行ってきた Iran-Japan Project of Ancient Texts チームの一員である松島は、しばしば遭遇した研究上の困難、とりわけエラム語文献の理解に快く救いの手を差し伸べ、かつ上述のシンポジウムに興味深い論文をよせその日本語ヴァージョン発表を快諾いただいた F. マルブラン=ラバットに深謝する。なお訳出に際し日本語文法用語の選択について森若葉氏(言語学・シュメール語)から貴重な助言を頂いた。謝辞とともに、和文についての全責任は訳者にあることを申し添えたい。

I エラム語の発見

およそ二千年にわたって、エラムは旧約聖書のなかにわずかに散見する言及によってのみ知られた存在であった。とりわけ半ば空想上の人物であるエラム王ケドルラオメルが想起される。エラムの言語の発見は漸進的で、ようやく19世紀になって、大規模な磨崖碑に刻まれた相互に異なる3つのタイプの楔形文字碑文をもとに、その解読が実現した。この「楔の組み合わせ」形の文字は、16世紀から17世紀にかけてこの地を訪れた旅行者たちが筆写したデッサンにより、ヨーロッパに知られていた。しかしこれらがまさしく文字であり、建築装飾でも、謎の呪術模様でもないことを認め、さらにこれらを分析し、それぞれ異なる3種類の楔形文字と3つの言葉で書かれていることを確かめ、各々の言語が何であるか同定することが必須であった [Basello 2004: 1-40]。18世紀になり、これらの碑文が発見された遺跡が、アケメネス朝ペルシャ時代の宮殿であると、正しく同定できるようになった。やがて碑文の言語が古代ペルシャ語 (当時の支配者の言葉)、バビロニア語 (この地の文字文化の伝統を表したもので、言語分類上はアッカド語バビロニア方言)、そしてこの地に固有の言語すなわちエラム語であることを立証するにいたった¹⁾。

これらの言語の解読は、40ほどの文字からなり、それゆえアルファベット系文字と推測された古代ペルシャ語から始まった。しかしおよそ120の文字からなるエラム語の解読はそうはいかなかった。シュメール人によって発明され、アッカド語を使う人々が表記に採用した文字のシステムを基に、エラム人は文字の形を事実上保持しつつ音節文字として利用した。ここに表意文字から派生した限定符が若干、そしてごくわずかの表意文字が加わった。

19世紀には、何人かの解読者が²⁾、3種の文字のひとつで自分たちが「メディア語」と呼ぶものの理解を目論んだ結果、この言葉の特徴が、セム系言語 (例えばバビロニア語) とともインド・ヨーロッパ系言語 (例えば古代ペルシャ語) ととも異なると性格づけた。1875年、ルノルマン F. Lenormant はこの言語とトルコ語やハンガリー・フィンランド語との類似性を明言し、ついでカルドウェル R. Caldwell [Caldwell 1856] がノリス E. Norris の意見にもとづきタミル語との類似性を主張した。このような、ドラヴィダ系言語との関連を示唆する仮説は、近年ではディアコノフ I. M. Diakonof、マクアルピン D. W. McAlpin [1981]、ハチキャン M. Khačikjan [1998] が再び取りあげている。

1) エラム語という呼称は、1874年セイス Sayce によりつけられ、最終的に保持されている。しかしシェイル V. Scheil は MDP シリーズの初期の巻では、「アンシャン系エラム語」(この地固有の言葉であることを強調) と「セム系エラム語」(アッカド語で書かれたテキスト) を意識的に区別している。

2) 初期の解読者たちの代表は次のような人々である：グローテフェント G. F. Grotefend、ウェスターガアド N. L. Westergaard、ド・ゾルシイ F. de Saulcy、次にノリス E. Norris、そしてオPPER J. Oppert、さらにはワイスバッハ F. W. Weisbach。

II エラム語の広がり

1 歴史的広がり

われわれが把握しているエラム語は、知られている限りで最初のエラム語テキストが成立した紀元前三千年紀前半以降である³⁾。それより古い、エラムにおける様々な未解読の線文字（プロト・エラム文字およびエラム線文字）使用時期に、人々がすでにエラム語を話していた蓋然性はあるものの、そのことは確認出来ていない。さらには前二千年紀中葉まで、裁判文書や奉納碑文がシュメール語・アッカド語で実際に書かれたことは、スッカル・マフ時代（前19–前15世紀）以前および同時代期におけるこの地の話し言葉の実態を、覆い隠している。

確認できる最古の段階は古エラム語（およそ前2600–前1500年）だが⁴⁾、文書の数是非常に少なく⁵⁾、保存状態が悪いため理解は進んでいない。ナラム・シンとアワンの一君主とのあいだで結ばれた条約が、古エラム語による最古の文書である（前2250年）。

その後前二千年紀後半になると、イギハルク王朝、シュトゥルク王朝の君主たちが神殿奉納碑文に中エラム語を使うようになった。一般にこの時期の言語が、「古典エラム語」と見なされている⁶⁾。

前一千年紀になると新エラム語（およそ前1000–前550年）、ついでアケメネス朝期エラム語（およそ前550–前330）と続いた。スーサ出土の新エラム語碑文は多くない。ブリック、石碑、その他に記されたいくつかの伝統的奉納碑文である。ほかにシュトルル Šutruurū とハンネ Hanne の磨崖碑文、ペルセポリス発見のブロンズ板碑文は同じタイプのものである。だがもっとも多くまとまっているのは、300点ほどの経済文書である（「アクロポリスのタブレット」「アパダナのタブレット」）⁷⁾。ベヒストゥンとペルセポリスにあるアケメネ

3) もしエラム語とドラヴィダ系言語の結びつきが明らかになれば、前五千年紀にエラム祖語が存在した可能性が考えられる。しかしこの仮説の根拠はまだ薄弱である。

4) 伝統の一時的空白は、言語事情の問題ではなく、むしろ政治的事情によるものである。しかしこの空白期は文献資料の内容を偏らせ、エラム語の進展状況をわれわれの目から覆い隠す暗黒時代をもたらしたと言えよう。

5) 「ナラム・シンの条約」の他に、4点の王碑文、おそらく書記学校の練習テキスト（語彙表1点を含む）が知られ、さらにシュメール語テキストまたは古バビロニア語テキストの中に挿入された、多分エラム語と思われる5点の呪術文が加わる。

6) 文書が提示する範囲でわれわれが認識しうるこの時期のエラム語進展の主な特色は、動詞体系における一部機能の消滅、代名詞（とりわけ関係代名詞）の発達、接尾辞 *-na* による属「格」出現がもたらした名詞句構造の変容、さらにそれまでと比べ後置詞が多用されるようになったことである。アケメネス朝期のエラム語に関して言えば、エラム語自体の中で起きた変容と、古代ペルシャ語から受けた影響をうわべから判別することは難しい。

7) このほかのジャンルとしては、少数ではあるが、編暦テキスト1点、占いの予兆を記したテキスト1点、いわゆる「ニネヴェ書簡集」と言われる一まとまりのテキスト、そして若干の行政文

ス朝時代のエラム語テキストは本質的には王碑文(三言語碑文)であり、ペルセポリス発見の行政文書は「城砦文書」「国庫文書」などと呼ばれる。そのほかにスーサとカンダハルからも文書が見つかっている。現在までに発見されたエラム語文書としてもっとも新しいものは前4世紀に位置づけられる。

2 地理的広がり

エラム語の地理的な広がりを見極めるのは難しい。とりわけ東方地域においては、ドラヴィダ系言語との繋がりについての仮説に左右されるためである。エラム語の使用は北西方面では、前三千年紀から前二千年紀にかけてのアゼルバイジャンで、また南東方面ではバルチスタンにまで達した可能性がある。

唯一確実なのはエラム語テキストが発見された遺跡がある地域における使用である。まずはフゼスタン地域(古代のスーシアナ)で、スーサとチヨガ・ザンビルによって代表される⁸⁾。次にアンシャン(現タル・イ・マルヤン)とリヤンを中心地とするファールス地域、これらにさらにいくつかの遺跡が加わるが、文字を記した資料の数は多くない⁹⁾。かつてのエラムと見なされる地域は、極めて少数のタブレットしかもたしていない。その原因の一つは考古発掘がまだ限定的にしか行われていないことにあるが、もう一つは、エラム人固有の伝統にも起因しよう。かれらにとって文字(裁判文書や行政文書における文字使用)は、メソポタミアの人々と同じような重要性を持っていなかったのである。

3 エラム語方言の広がり

エラム語の方言にどれだけの多様性があったかという問題は、エラム語の歴史的・地理的広がり大きく関わる。しかし書かれた資料は十分な情報を提供してくれない。少数の、しかも時に議論を呼ぶ様相が見られるばかりである。

III エラム語理解を今なお研究途上に行っている難点について

1 孤立した言語であること

エラム語は膠着語の一種とされている。しかし膠着諸言語は共通する特性を有しながらも、その機能作用において大きな多様性がある。エラム語を理解するために、古代中近東にお

⁸⁾ 書がある。

8) テベ・ボルミ Tepe Bormi, テベ・ポンポ Tepe Pompo, シュシュタル Šuštar, デズフル Dezful からもいくつかの文書が発見されている。

9) 磨崖碑文はイランのハマダーンとトルコ東部のヴァン湖近くでも見つかっている。またイラクのニネヴェ、アルメニアのアルマヴィル・ブルール Armavir Blur, アフガニスタンのカンダハルからエラム語のタブレットが発見された。

るほかの膠着語、たとえばシュメール語やフリ語を参考にすることはできない¹⁰⁾。近似の構造と語彙の共通性をもつ姉妹語があつて理解を助けてくれるわけではない。このような大きな特殊性ゆえに、エラム語固有の構造を的確に把握し記述することは難しい。エラム語を説明するための学術用語として、セム系言語やインド・ヨーロッパ系言語の説明用語を多用しすぎる傾向があるため、この言葉についてしばしば不適切または不十分な枠組みや範疇を作り出してしまっている（例えば、代名詞、従属節、時制の概念などの場合である）¹¹⁾。

2 限られた数のテキストとヴァリエーションの乏しさ

われわれがエラム語の分析を行う場合、イラン高原本土地域の様相を物語る資料が少ないため、主としてスーサとその周辺からもたらされた文書に頼らざるを得ない。しかしこれではエラム語全体という観点から偏った姿しか見えてこない。スーサ地域の居住者とその文化は、他のエラム地域と比べるとメソポタミアに向けより大きく開け、その影響を受けているからである。

しかも王碑文と行政文書がわれわれにとって文字資料の大半を占めている。ところで行政文書は、限られた形式的文言をもっぱら用いており、言語の全体構造を把握するにはあまり適切ではない。王碑文や奉納碑文について言えば、繰り返し表現が多いという特徴があり、語彙や形態・統語論に関わる仮説の証明には不十分である。

3 エラム語に適応しない文字システムに起因する音韻論上の難点

エラム語表記には、全く異なる音韻構造を持つ言葉のため発明された楔形文字が使われたが、このことはシュメール語やアッカド語にはないエラム語独自の音素の「直接」的表記を阻んだ¹²⁾。エラム語テキストにおいては、音は、書記が音価の観点から大凡近いと考えた文字を用いて表記されたが、この大凡の近似性が文字表記のヴァリエーションと、常態とは異なる書記方法の原因となり、文意の曖昧さや仮定的解釈の余地を生じさせている。音価と文字の対応の多様性は、子音にも母音にも関わっている。

10) シュメール語と結びつけようとした試論があるが、説得的ではない [Steiner 1990: 143-176]。しかし A. Kammenhuber によって展開されたフリ語の動詞システムとエラム語の動詞システムの比較研究は示唆に富んでいる [Kammenhuber 1974: 157-248]。

11) アケメネス朝時代の三言語併記碑文には、エラム語テキストとともに古代ペルシャ語ヴァージョンとバビロニア語ヴァージョンが見られる。だがこれらは後期のものでありまた繰り返しが多く、限定的な参考（語彙やテキストの内容における共通点など）にしかならない。ただし、これらの三言語併記碑文のうち古代ペルシャ語ヴァージョンやアッカド語ヴァージョンに転写された人名や地名、そしてギリシャ語語彙の読みは、エラム語の音韻システムを復元するための重要な要素をいくつか提供してくれる。

12) J. Tavernier によって作成された Tavernier 2011: 320 の音素表を参照。

a) 子音

同じ一つの語を記すおり、同じ音節が多様な形で記載されている事実は¹³⁾、少なくとも一つの唇歯音 f/v, 二つの歯擦音 (後部歯茎音/tch/と歯茎音/ts/)、二種のそり舌共鳴音 (ll と rr) の存在を想定させる。

閉鎖音に関する別の形のヴァリエーションは、有声音と無声音の対立を疑わせ (このことがメソポタミアの楔形文字にも起こったことも含め)¹⁴⁾、さらには強子音と弱子音の対立の可能性を想定させる (ドラヴィダ系言語で立証される現象)。

以上の仮説はもうひとつ別の文字表記の交替現象によって補強される：若干の語において、一つの子音を子音二つで表記したり、子音一つで表記したりすることである (一般に閉鎖音において見られるが、-r の場合にも起きている：*ta-ak-ki-me* / *ta-ki-me*, *hu-ut-taš* / *hu-taš*。ただし以上のような例を除けば、他の多くの場合このような交替現象は認められない (常に *ku-ti-iš* であり **ku-ut-ti-iš* と記されることはない)。

b) 母音

母音の後に不安定な M (または N) が表記される事象 (^d*hu-um-ban* ^d*hu-ban*) は、エラム語に鼻音化された母音があった蓋然性を示唆する。

mu-si-in / *mi-si-na* の様な交替表記や *tu-ru-iš* のような母音「断絶」表記が見られることから¹⁵⁾、音素/o/または/ü/または/ə/の存在が想定される。

c) 形態論の理解に及ぼす影響

文字体系と音韻体系との不適合が引き起こしたこの精密ではない表記法は、形態論の理解に大きな不確実性をもたらすこととなった。

要するに、たとえば属性や数の形態素として現れる重音 (例えば *betip* / *betippe*)¹⁶⁾ が、音韻的な意味を持つものか形態的な意味を持つものか、あるいは単なる表記上のヴァリエー

13) 例えば以下の例に見る二様の表記：W / M (*ligawe* / *likame*) D / Z (*zidael* / *zizael*) T / Š / S (*kutir/kusir* ; *temti* / *šemti* / *simti*)、エラム語の名前をアッカド語で表記した折の L / R 音の交代 (アッカド語で *Lagamal* / エラム語で *Lagamar*) などが挙げられる。

14) 若干の語に関しては有声音文字と無声音文字の交替表記が見られる (例えば *du-ni-* / *tu-ni-*; *da-ak-ki-me* / *ta-ak-ki-me*; *ba-ri-iš-ta* / *pa-ri-iš-da*)。一方他の語では表記が安定している (*i-gi*「兄弟」が **i-ki* などと表記された例はなく、*ik-ki*「家で」が **ig-gi* などと表記された例も皆無)。

15) 連続する二つの母音の音が Cv-v(C) 連続の内部で変わってくる。

16) 少なくともこの語に関して言えば、子音を重複させる表記は専ら中エラム語と新エラム語に (*be-ti-ib-ba*, *be-ti-ib-be*)、子音重複がない表記は古エラム語とアケメネス朝エラム語に見られる (*be-ti-ip*) という事実に注目したい。時代と書記の流派を視野に入れつつ差異を系統的に検討する必要がある。なお F. Grillot [2008; 68-69] は「接尾辞の繰り返し」の例を多数挙げているが、これが現れる理由については説明していない。

ションなのか、区別が難しいことである。末尾の母音表記にヴァリエーションがある場合には、さらに難度が高くなる (*ú-ri-pu-pi* / *ú-ri-pu-pé* / *úr-pu-up-pá*)。

さらには、とりわけ代名詞の解釈に関して、どのような母音縮約が考えられるかという問題が加わる。たとえば、その存在が証明されている二つの異なった形 *in duniḥ* / *un duniḥ* 「私はそれを捧げた」を、IとUの中間母音の表記と考えるか (*u/i* を /o/ または /ü/ と捉える)、あるいは単独の文法形 *in* (代名詞で奉納行為の直接目的語) を含む文と、複数要素の縮約形 *un* を含む文 (直接目的を示す代名詞 *in* と主格1人称単数形 *u* 「私」が合体した縮約形を含む文であると見なす: *un < u+in*) の対立と考えるか、躊躇してしまう。同様の問題は代名詞複数形を表す二つの表記形 *a-pu-un* / *ap-pi-in* (三人称複数形) の場合も起こる。これを中間母音の存在を示唆する表記とみるか、直接目的単純形「それら(を)」*appin* と、複合形 (*apun=ap* 「彼らに向かって」+*u* 「私(は)」+(*i*)*n* 「それ」) の対立表記と見るか、という問題である [Grillot 2008: 33]¹⁷⁾。

音韻体系をざっと概観し不十分な知識に起因する諸題点に深入りすることはそろそろ切り上げたい。ただもう一点のみ言及しておこう。IとEは音韻的に、または文法的に区別されていたのだろうか？ 二つの形態素、すなわち指示語 *i* と所有格を示す接尾辞 *e* が別個に存在していたのだろうか？ 文例を見る限り、特有の機能を備えた二つ別の形が確かに存在したようである。(例えば *su-uh-mu-tú i* は「その碑」であり¹⁸⁾, *hiš.e* は「彼の名前」である¹⁹⁾)。しかし別の例文では、*-i* が所有の意味を示しているようにも思われる(少なくとも現代語に訳されている限りでは) : *siyankuk siyan-i.me* “seinen Siyankuk-Tempel” 「彼のSiyankuk 神殿」 [EW : 1095]。

IV 膠着構造

エラム語は膠着語の一つと位置づけられている²⁰⁾。この膠着語という呼称は、言語の機能構造に着目した呼称であり、言語系統に着目したものではない。すでに言及したことだが、エラム語と親族関係を持つ言語は知られていない。

膠着語グループをまとめている共通の特徴は、何よりもその類型性であり、言語学者たちはこの類型性内部における異なった様相について盛んに議論してきた。しかしながら、形態

17) ただし二つの見方のうち初めの説に有利に働く事実がある：複数が前提となる文脈の中で、*apun* は常に、単数の文脈であれば *ir* がおかれるべき場所に位置する : *Hišmitik ak Ruhuratiḥ lansitippa apun ahan murtah* 「ヒシュミテイクとルフラティルの黄金(の神像)、私はそれらをここに安置した」 / *Pinigir lansitira ir ahar murtah* 「ピニギルの黄金(の神像)、私はそれをここに安置した」。

18) “diese Stele” [EW : 1099]

19) 実際の表記は次のようになる : *hi-iš-e* / *hi-i-še-e* / *hi-i-še* / *hi-še*

20) 加えてその「能格性(ergativity)」についての議論がある : Khačikjan 1998: 63-66.

論の視点から見た基本的な特徴は、語根に対して並置されたそれぞれの形態素が統語的に何を表すのか、である。そのおり各形態素はある一つの機能を担うことになる。それぞれの機能は膠着によって実現するが、語根は名詞形においても動詞形においても不変である。接尾辞は語根の形を変えることなく、ただ付加される。

1 名詞の構成素における膠着

エラム語において名詞形（実詞および動詞の名詞形）に付加する形態素は多くない：属性の標識辞であり、「有生物」においては数および人称を特定する標識辞である。

a) 標示の形態素

名詞形態素の属性には、「有生物 animé（神または人間を示す名詞）」と「無生物 inanimé（物、材料、動物、概念など）の区別がある。有生物では数と人称が標示される。

属性	単数形	複数形
有生物		
1人称 ²¹⁾	-k	
2人称	-t	
3人称	-r ²²⁾	-p
無生物	-me -n -te（まれに見られ、異論もある形）	

限定構造に関しては、名詞形の構成素に対する膠着現象は限られてくる²³⁾。

b) 限定の機能

限定作用（一般には所有関係）は、限定される語（限定が及ぶ中核となる語）の属性と単複に応じた標識辞によって括られる構成により表わされる。この統合句（被限定詞+限定詞）では、限定される語が一つである場合は句全体の最後に属性・数の標識辞が来る。

21) E. Reiner は 1 人称に locuteur, 2 人称に allocuteur, 3 人称に delocuteur という呼称を導入し使用した。

22) 3 人称単数の形態素は、一部の名詞が語基にこの形態素を付加して作られるという面において、語彙の形成に寄与している：例えば *sunki.r* 「王」、*sunki.me* 「王国/王権」、*siya.n* 「神殿」。しかし名詞の大半は、単数形ではその属性を標示する形では現れない。一致作用は形態素に基盤を置いて行われるのだが（限定語を伴う名詞句または述語における名詞形の場合）、そのおり形態素は、語の意味に加えて、形式の面からもその属性を標示することになる：例えば、*hiš Untašnapiriša.me* 「ウンタシュナピリシャの名前」では、*hiš* 「名前」には形態素が付かず、*-me*（限定する語の後に置かれた無生物接尾辞）が *hiš* が無生物名詞であることを示すのである。

23) エラム語で頻繁に見られる複合語彙とは明確に区別する必要がある。

- 例²⁴⁾ *amma nap. (i) p. r(i)*²⁵⁾
 母 神(3・複) (3・単) 「神々の母」
 → *amma* (母) には属性の標識辞が付かない。
 → *-p* は *nap* (神) が複数であることの標識 (=神々)
 → *-r* は *amma* (有生物, 3人称単数) を標示し、
 同時に限定句を閉じる。

c) 事行に関わる要素の他の機能について

ある節の中で名詞構成要素が果たす役割を標示する格変化は存在せず、語の形 (語根+接尾辞) はその機能を明示しない²⁶⁾。

「古典エラム語」には後置詞はない(あるいはほとんどない)。

文中における語句の機能の理解を可能にする二つの基準が導入される。

- 語 (または限定詞を伴う名詞句) の位置と動詞形との整合性。
- 所記 (シニフィエ) の性質 (すなわち名詞句の属性) と述語のタイプ (語尾変化など)。

i 位置

「主語+(直接目的語/間接目的語)+動詞」が標準的な語順であるため、節の冒頭におかれる頻度をもっとも高いのは主語である。

例 *Napiriša u. n hani. š*

「ナピリシャは私を選んだ。」

- *Napiriša* : 神名; 動詞 *hani-* の主語・3人称単数 (「彼は選んだ」: 動詞活用形 I)
- *-un* (「私を」): 人称代名詞 1人称単数・直接目的語

直接目的語または間接目的語である補語を目立たせるため節の冒頭に置くことがあるが、文法機能の誤解を招くことはない。この語が行為の対象である場合、述部の動詞形 (文の主語に一致する) が大抵は曖昧さを払拭する。

例 *Upurkupak ... siya. n kuši. h*

「ウプルパク (のために) …私は神殿を建てた」

- 動詞活用形 I *kuših* における接尾辞 *-h* は主語が 1人称単数であることを示す。固有名詞ウプルパクは主語ではあり得ず、行為の対象となる。

24) 以下の例は、形態素ごとに区切った形で提示する。実際の表記をそのまま写したものではない。

25) 音節文字表記は次のようになる: ⁴*ki-ri-ri-ša am-ma na-ap-pi-ip-ri*

26) しかしながらエラム語自体の内部および標識辞に生じた変容は、新エラム語において、名詞の補語であることを示す *-na* の導入へとつながった。それはそれとして、接尾辞 *-ma* (おそらくは無生物を示す語尾 *-me* と従属関係を標示する *-a* が接続したうえでの縮約形) は、場所を示す格語尾と理解することが可能である。

ii 一所記 (シニフィエ) の性質 (「有生物」は人と神のみ, 無生物はその他に摘要される) と述語の形

名詞が有生物であるか, 無生物であるかは²⁷⁾, その語の機能を「通常ならば」規定する²⁸⁾。有生物名詞は動作主, あるいは行為の対象となりやすく, 無生物名詞は「その性格上」行為の受動体となる。このように能動・他動詞の動詞形 (動詞活用形 I) の主語は「通常ならば」有生物であり²⁹⁾, 直接目的は無生物である。一方, 受動形では, 主語は無生物名詞にも, 有生物名詞 (または代名詞) にもなり得る。

例 *nur-kibrat kuši.h ... Inšušinak siyan-kuk.ra i.n duni.h*

「私は「世界の光」(神殿)を建造した。…私はそれを聖堂のインシュシナクに献げた。」

—*kuši.h* は動詞活用形 I (能動・他動詞) の 1 人称単数形:

無生物 *nur-kibrat* は直接目的語

—*duni.h* は動詞活用形 I (能動・他動詞) の 1 人称単数形:

有生物 *Inšušinak* は間接目的語:

無生物名詞 *nur-kibrat* を復唱する *in* は直接目的語

例 *siya.n Inšušinak.me upat.imma kuši.k*

「インシュシナクの神殿が土によって建造された」

—*kuši.k* は受動態; 主語は名詞句 *siyan Inšušinak.me*

名詞句の核となる語は無生物 *siyan* 「神殿」で, 建造行為の被動作主。

—*upat.imma* 「土によって」は修飾の接尾辞—*imma* を伴う名詞句

d) 場所を示す補語

場所を示す補語は特有の様態を有している: 場所を説明する語は「その本性により」場所を示す補語となり得るが³⁾, この機能を果たすため語句の中に特定の標識辞を伴うことなく現れることがある³⁰⁾。

27) 1 人称と 2 人称の代名詞の場合, 機能が違って来る。これらは直接目的語になり得るが, その場合固有の標識辞 (-n) が付加される: *Napiriša u.n haniš u.n hahpu.š* 「ナピリシャ (大神) は私を選び私を愛した」。

28) ここで「通常ならば」というとき, 私は H. Hagège [1982: 116-118] がいくつかの言語に関して「言語に現れた宇宙観の人間中心的性格と発話の構造における行為者の優先順位」および「動作主である自我 ego から無生物にいたるまで縮小的に変化することがある被動作者ではない蓋然性」について語る際, 照会したもののことを念頭に置いている。「この自我は通常の場合は動作主であり, それゆえわざわざ有標のマークが付くことはないと思われるが (予想されない場合には必ずマークされるから), 『特異な事態によって』被動作主になる場合, 有標のマークが付く (逆転のケース)。」

29) 有生物がある事行のなかで被動作主である場合は, 動詞の形は特定のマークを受け手とする (*Pinigir ... ir ahar murta.h* 「ピニギルの (神像)。…私はそれをそこに置いた」: 能動-他動詞・動詞活用形 I の前の *ir* は, 直接目的語が有生物に属することを示す標識である)。

30) 場所を示す補語の形は知られる限り多様である: マークなしの場合 (「場所の名詞」), 接尾辞

例 *siyan Upurkupak.me ... u alumelu kuši.h*

「ウプルクバクの神殿 …私はそれをアクロポリスの上に建造した」

—*siyan Upurkupak.me* : 限定語を伴う名詞句

直接目的語で文意の中核であるため文頭に置かれる。

—*u* : 文の主語で代名詞 1 人称単数形 ; 「私」

—*alumelu* : 「アクロポリス」 ; 標識辞は付かない。

—*kuši.h* : 動詞活用形 I, 1 人称単数 (*-h*), *u* に対応する。

2 動・名詞述語における膠着

述語複合体において膠着は重要な働きをする。3つのタイプの述語がある : 名詞的述語, 動・名詞的述語, 動詞的述語である。

a) 主語と動詞活用形の標識

i 一名詞的述語

いわゆる「名詞節」においては, 名詞または形容詞が述語となる³¹⁾。これは, (仏語・英語などで) ある状態 (結果の説明ではない) を述べるため *<être/be>* 動詞を使って作る節に相当する。名詞節は古エラム語では頻繁に用いられた模様だが, それを確かめるためのテキスト資料は極めて少ない。中エラム語では, 通常は従属的述語がこの働きをする³²⁾。

述語の接尾辞はそれぞれの属性における名詞標識辞をとり, 有生物においては性・数に一致する (*k, t, r, p; me, n(i), te*, 前図参照)。

この述語における接尾標識は, (主語に付加されるか否かに拘わらず) 主語と述語の関係に一致する。

例 *pitir Naramsin(ni).ra pitir-u.r(i)*

「ナラムシンの敵と私の敵」

—*pitir Naramsin(ni).ra* : 主語名詞句 (被限定語 *pitir* 「敵」, 限定語 *Naramsin* (王名), 句全体を括る *-r(a)*。

—*pitir-u.r(i)* : 属詞名詞句 (被限定語 *pitir* 「敵」, 限定語 *u* (私) ; 句全体を括り節の主語に一致する *-r(i)*。

ii 動・名詞形述語

このタイプの述語は二つの接尾辞をとる : 主語の人称は名詞形述語の場合と同じ語素に

↘ *-ma* を伴う場合, 表意文字 (AŠ サイン) の導入と接尾辞 *-ikki* を伴う場合である。

31) エラム語における形容詞の存在を認めることが前提となる。例えば *riša* 「大きい」など。

32) *u sunkik anzan šušunki (... kuših)* : 「私, アンシャン (と) スーサの王 (である者) (…(私は) 建造した)」 ; *u* = 私・主語・1 人称単数, *sunki.k* = 述語 (語根 **sunki* + 1 人称単数形語素 *-k*)。

よって標示され ($-k, t, r, p$)³³⁾, これに加え接尾辞 $-n$ が語根と人称接尾辞の間に挿入される (動詞活用形Ⅲ)³⁴⁾。

	単数形	複数形
1人称	<i>hutta.n.k(i/a)</i>	
2人称	<i>hutta.n.t(i/a)</i>	
3人称	<i>hutta.n.r(i/a)</i>	<i>hutta.n.p(i/a)</i>

この形は、行為を起こすという事実に適用されるため、たいていの場合、翻訳文は現在形または未来形となる：*hutta-*「実現する」；*hutta.n.k(i/a)*「私は実現する行為の当事者である」→「私は実現する/実現するだろう/実現できる」。

例 *puhu.sunkir.p(e) GIŠ.GU.ZA atta api.ri.n(a)-ma murta.m.pi*³⁵⁾

「王の子供たちが彼らの父の玉座に就くであろう」

$-murta.m.pi = murta$ 「就任する」+ $n+p(i)$ (主語。有生物複数)

$-puhu.sunkir.p(e)$: 主語名詞句 (被限定詞 *puhu*「子供」+限定詞.*sunkir*「王」+ $p(e)$ 複数標識を伴いつつ句を括る (これで語尾が付かない *puhu* が有生物複数であることが分かる)。

$-GIŠ.GU.ZA\ att\ a\ api.\ ri.\ n(a)\ -ma$: 場所を示す補語名詞句 (この機能は接尾辞 $-ma$ 「～の中で/に」により示される) で、二つの限定名詞句により二重に括りをかける形によって構築される；*GIŠ.GU.ZA*「玉座」(ここでは表意文字で表記されている) は *atta*「父」により限定され、*atta* は *api*「彼ら」により限定される； $r(i)$ は「彼らの父」という句を括り、無生物の接尾辞 $n(a)$ は「玉座」を限定する句を括る。

GIŠ.GU.ZA\ att\ a\ api.\ r.\ n(a)\ -ma

「玉座」 「父」「彼ら」*atta* を受ける 「玉座」を受ける ～の中/上に

iii 動詞形述語

動作主によって被動作主に対し実行された行為のプロセス (それゆえ過去) を説明することから「動作主格」と呼べる本来の動詞述語 (動詞活用形Ⅰ) である。活用形は動作主を明示する接尾辞とともに表れる (単数形は $-h, -t, -š$, 複数形は $-hu, -ht, -hš$) : *huttaš*「彼は

33) 無生物が動詞の主語になることがないため、無生物標識辞は現れない。

34) 自動詞 (特に動きを表す動詞) については、もう一つ別の活用形 (動詞活用形Ⅱ) の存在が証明される。その場合接尾辞 $-k$ が接尾辞 $-n$ の代わりに現れる。この活用形はアケメネス朝期のエラム語で発達したとみられる。一部の研究者は自動詞と他動詞の区別に注意を払わないまま、動詞活用形Ⅱと動詞活用形Ⅲを並列的に扱っている [Grillot 2008: 77-79]。ただし動詞 *hutta* 活用形Ⅱの例文形 ($*hutta-k-r(a)$) は人工的で存在しない形である。動きを示す動詞の機能と話法については以下を参照：A. Kammenhuber 1976; J. Tavernier 2011: 329.

35) ここでは P 音の前で $N > M$ 。

(あることを) 実現した」。

	単 数 形	複 数 形
1 人称	<i>hutta.h</i>	<i>hutta.hu</i>
2 人称	<i>hutta.t</i>	<i>hutta.ht(i)</i>
3 人称	<i>hutta.š</i>	<i>hutta.hš(i)</i>

b) 副次的標識

i 「法」の接尾辞

動詞活用の形相のなかで、膠着は実に多様な展開を見せる。その場合法を表す接尾辞が人称を示す語尾の後に来る：祈願法を表す *-ni* (*hutta.š.ni* 「彼が成し遂げるように」)；おそらくは意志または予測を表す *-ma* (*hutta.ma.n.ra*)³⁶⁾，結果法 (?) を表す *-ta* (*hutta.š.ta* 「彼は (それが) 成されたことを知る/知った」)³⁷⁾。

複合的な法 (詳細についてはしばしば理解困難) では3つ、4つの語尾が続くことがある (*hutta.ma.n.pa*, *pepsi.r.ma.n.ra*)³⁸⁾。

ii 一行為を示す標識

以上のほか動詞複合体の中に、動詞語根に先行し、節の構成要素を照会する働きをされると思われるいくつかの標識を含める必要がある。これはシュメール語にも見られる (しばしば「復唱の代名詞」と呼ばれる)³⁹⁾。この照会は述語の形態に応じ多様である。

例 *u ... Sin kulla.n.ka kula.a ur tumpan.n.ra ...* (*kuši.h*)

「私、…私が祈るとき私のこの祈りを聞き届けるシーン (のために) (私は建造した)」

—*u* … : 人称代名詞 1 人称単数「私」。

—*Sin kulla.n.ka* : *-a* によって標示される従属節、動詞活用形 III + 1 人称単数標識の *-k-* : 「私が祈る (時・から)」

—*kula.a u.r tumpan.n.ra* : *tumpanra* の末尾の *-a* によって表示される従属節 (*kullanka* と同様)、動詞活用形 III (3 人称単数を示す標識辞 *-r-* を含む (*tumpanra*) ; 先行する節の補語である *Sin* は、ここでは *Sin* を主語とする *tumpanra* の前に置かれた *r* (*u.r. tumpanra*) によって復唱されている。*ur* の *u* は従属節の間接目的語である : 「私のために (願いを聞き届ける)」。

36) "ein Machender, einer, der macht, machen wird" [EW: 712].

37) 祈願法以外の法については多くの議論がある。

38) *hutta.ma.n.pa* "sie sind Machende Machen-sollende" [EW: 712], *pepsi.r.ma.n.ra* "einer, der sich ans Erneuern macht" [EW: 194].

39) Stolper 2004: 76 "nominal constituents of a clause are frequently (resumed) by one or more pronouns placed immediately before the verb at the end of the clause. In Middle Elamite these resumptives are in clusters".

u . . . Sin kulla.n.ka kula. a u r tumpa.n.ra
 私 シーン 私は祈る 祈り この 私 シーン 彼は聞き届ける
 . . . *kuShi.h*
 私は建造した

おわりに

多くの議論を呼び起こしている動詞システム全体の検討にあえて入らないままこの発表を終えるにあたって、私は M. Stolper の言葉を引用することにより結論にかえたい：「エラム語はしばしば ‘理解が進んでいない言葉’ と形容されるが、それは実際には、個々のエラム語テキスト翻訳文の間の大きな差異が、文法や語彙についての解釈の相違を反映しているからである。……意見の違いが大きな分野は以下の通りである；特定の形態素、特に動詞語尾に接続する *-ma*、動詞と節に続く接尾辞 (*-ta*) と *-a* について；代名詞と、動詞に呼応する一群の代名詞と動詞や方向性を示す要素との構築について；形態論と統辞論の両面から中エラム語とアケメネス朝期エラム語の理解に差異があること；さらには、それぞれの語の意味について」⁴⁰⁾

多くの課題を抱えた研究であることが、エラム語の魅力でもある。新しい解釈の証明を厳密に行うこと、様々な種類の文書群を熟知すること、新しいテキストの発見を期待すること、これらを通じ古代中近東・アジア世界におけるこの実に独創的で豊かな文明をよりよく理解すること、エラム学にはそのような前途が開けている。

参考文献

EW: Hinz W., Koch H. 1987: *Elamisches Wörterbuch*

Basello G. E. (2004) Elam between Assyriology and Iranian Studies. In: A. Panaino & A. Piras (eds.), *Melammu Symposia IV*. Milan.

Caldwell, R. (1856) *A Comparative Grammar of the Dravidian or South-Indian Family of Languages*, Third edition, Revised and Edited by J. L. Wyatt and R. Ramakrishna Pillai. [Reprint of the 3rd edition, originally printed by K. Paul, Trench, Trübner & Co., Ltd, London], Oriental Books Reprint Corporation. New Delhi.

40) “The frequent characterization of Elamite as ‘poorly understood’ means in practice that sharp differences in the translation of individual Elamite texts reflect disagreements about grammar and lexicon . . . The main areas of disagreement are on the meaning of particular morphemes, especially the verbal auxiliary *-ma*, the verb- and clause-suffixes *-t* (*a*) and *-a* ; on the construction of pronouns clusters with verbs and directional elements ; on the understanding of morphological or syntactic differences between Middle and Achaemenid Elamite ; and on the meanings of words.”

- Friedrich, J., Reiner E., Kammenhuber A. (eds.) (1997) *Altkleinasiatische Sprachen und Elamitisch* : 54-118. Handbuch der Orientalistik. Leiden. Köln, E. J. Brill.
- Gragg, G. (1995) Less Understood Languages of Ancient Western Asia. In : J. M. Sasson (ed.), *Civilizations of the Ancient Near East IV*, 2161-2179.
- Grillot-Susini, F. (et C. Roche) (1987) *Eléments de grammaire élamite*. Paris : Editions Recherche sur les Civilisations.
- Grillot-Susini, F. (2008) *L'Elamite, éléments de grammaire*. Paris, Geuthner.
- Hagège, C. (1982) *La structure des langues*. Paris. (和訳 : アジェージュ著, 東郷雄二訳『言語構造と普遍性』白水社 1990年)
- Hinz W. & Koch H. (1987) *Elamisches Wörterbuch*. Berlin, Dietrich Reimer Verlag.
- Kammenhuber A. (1974) Historisch-geographische Nachrichten aus der althurrischen Überlieferung, dem Altelamischen und den Inschriften der Königen von Akkad für die Zeit vor dem Einfall der Gutäer (ca. 2200/2136). *Acta Antiqua Academiae Scientiarum Hungaricae* 22 : 157-247.
- Khačikjan M. (1998) *The Elamite Language*. Documenta Asiana 4. Rome : Istituto per gli studi micenei ed egeo-anatolici.
- Krebernik M. (2005) Elamisch. *Sprachen des Alten Orients*, Darmstadt : 159-182.
- Labat, R. (1951) Structure de la langue élamite (état présent de la question). *Conférences de l'Institut de Linguistique de Paris* 9 : 23-42.
- McAlpin D. W. (1981) Proto-Elamo-Dravidian : The evidence and its implications. *Transactions of the American Philosophical Society* 71 (3).
- Quintana, E. (2010) *La Lengua Elamita (Irán pre-persa)* Gram Ediciones. Madrid.
- Reiner, E. (1969) The Elamite language. In : Freidrich, Johannes et al. (eds.) *Altkleinasiatische Sprache*, pp. 54-118. Handbuch der Orientalistik, Leiden. Köln : E. J. Brill.
- Stolper, M. W. (1992) Elamite. In : R. D. Woodard (ed.), *The Ancient Languages of Mesopotamia, Egypt, and Aksum* : 60-94.
- Stolper, M. W. (2004) Elamite. In : R. D. Woodard (ed.), *The Cambridge Encyclopedia of the World's Ancient Languages*, chap. 3 pp. 60-94.
- Steiner G. (1990) Sumerisch und Elamisch : typologische parallelen. *Acta Sumerologica* 12 : 143-176.
- Tavernier, J. (2011) Elamite. Analyse grammaticale et lecture de textes. *Res Antiquae* 8 : 315-350.

(著者 : フランス国立科学研究所)

(訳者 : 元法政大学)